地域との架け橋となった盃

堂前雅史 *DAUMAE Masashi*

私が和光大学に赴任したのは2001年であるから、鈴木先生とは 3 年間の付き合いでしかないことに気付いていささか驚いている。それほど濃密な 3 年間を過ごさせていただいたのだ。赴任後の翌年、フィールドワークを担当することになった私は、通学途中に通る鶴見川や岡上の山林の生物に興味を懐き、これらを教育資源としてフィールドワークを立ち上げることを決意した。少し回っただけで稀少種を発見できる岡上の自然をフィールドにすれば、生態学フィールドワークが成り立つという確信が強まった。

そんな私に、ご挨拶しておいた方が良いからと、フィールドの水田の地権者の宮野薫さん宅に連れて行って下さったのが鈴木勁介先生だった。初めて伝統的農村として岡上の世界を教えていただいた。思えば、それまで私の目には野生生物ばかりが目に入っていて、古くから住む人々の生活の姿は意識していなかった。門の脇に咲く瑞々しいシャガの白い花や、土手に揺れるナルコユリの花を妙に覚えている。2002年 4 月12日のことだった。

やがて授業でフィールドにしている小川でゲンジボタルの復活を目論んでいるということを鈴木先生に相談したところ、同年の 6 月14日に地元・岡上西町会の五十嵐会長を紹介された。研究室に伺うと、私の他にも、地域の映像記録を残す授業をやりたいという小関和弘さんと、大学の学祭と町会の納涼祭を連携させる提案を持ち込んできた学生がいた。私の提案のみならず、いずれの提案も会長に歓迎していただき、実現に向けてスタートすることになった。思い返せば、この時、和光大学と岡上西町会の様々な連携のきっかけになっていた瞬間だったとも言えよう。

その後、2002年11月、私のフィールド授業を受講した学生たちを中心に、ゲンジボタル復活を目指す環境サークル「和光大学・かわ道楽」が結成された。岡上での活動について様々なアドバイスを下さった鈴木先生に、リーダーの学生が「かわ道楽」の顧問になってほしいとお願いに伺い、連絡帳の巻頭言を依頼した。先生の巻頭言に曰く「五丹田川で鯰を飼いましょう」と。我々が鶴見川のナマズの話をしたところ、ナマズ養殖をしてくれたら、酒肴にもなろうし、地場産業の開発にもなるだろうという夢を語られたのである。地域の振興に役立つことを願い、食にこだわり続けてきた鈴木先生らしい要望であった。

学生たちがホタル復活を目論んで活動していた小川について、鈴木先生に付近の地名を伺ったところ、「鬼ノ窪」と即答された。なにやら由来のありそうな名前で気に入って、学生たちはホタルを復活させた小川の名前を「鬼ノ窪川」と呼ぶようになった。他にもかわ

道楽で、和光大学の奥の山を「逢坂山」、その隣の山を「お伊勢山」と呼ぶようになったのも、鈴木先生や宮野さんから伺った話に興味を持ってのことである。鶴見川の自然保護でご一緒している鶴見川源流ネットの方から、「かわ道楽の作業報告を読んでいると、今日は逢坂山、前回は鬼ノ窪……って、なんだか平安貴族が狩衣着て活動しているようなイメージで面白い」と言われたように、かわ道楽の活動が地域文化に包み込まれているものになったのも、鈴木先生の御指南の賜物であった。

かわ道楽の学生たちは、岡上地域の自然保護とともに、先述の学祭がらみで始まった納涼祭のお手伝いにも、あるいは1996年に鈴木先生が復活させた川井田地区どんど焼きのお手伝いにも参加した。宅地の自然保護を行う場合には、地域との信頼関係が欠かせない。地元から見れば、見覚えのない若者たちが手に手に刃物を持って軒先の山林や小川をうろつくのであるから物騒であることこの上ない。しかし、学生たちがお祭りに参加して、地域住民と一緒に作業し、踊りを踊り、お酒を飲めば、関係が変わってくる。当初は怪訝な目で見られかねなかった学生たちの活動は、地域の方たちから「がんばってるね」と声をかけていただき、時には差し入れまでいただけるようになった。自然保護を生物学の課題としてしか考えていなかった私にとっては目から鱗の落ちる思いであった。かくして盆踊りもどんど焼きも内包される「自然保護活動」が、今日まで続くことになった。

2004年に鈴木先生が退任された後も、地域とのこうした関係は続いた。この教育的効果が学長室から注目されて、文部科学省の補助事業である教育GPに応募するように要請があり、同僚たちと作業を開始したのは2007年のことであった。言われてみれば、地域の山河と社会を大学教育のフィールドとして活用している教育活動とも言えるわけで、そうした視点から従来からの実績を教育プログラムとして立案した。1 年間の検討作業を経て応募したプランは、2008年度の審査を通って、和光大学として初めてのGP採用となった。事実上、鈴木先生の敷いたレールの上を走ったプランであったので、2008年11月3日、先生宅へ報告に伺った。内心、「文科省から気に入られるようなことをしおって」と叱られるのではないかと心配していたのであるが、心から喜んで下さった。それが、鈴木先生とお会いした最後となった。

和光大学と地域との関係は、他大学にはない独特の地域貢献とシチズンシップ教育の場として評価されつつあるが、それは間違いなく鈴木勁介先生が地域の方々と交わした盃の賜物であった。そして、かつて鈴木先生が書かれた「教員の主体的な個別的地域参加とは別に、総体としての和光大学が岡上地区に如何なるかたちで関与していくかが、今後は問われることになるであろう」[1] という宿題に、これから取りかからねばならない。

《注》

1）鈴木勁介（2004）「地域社会と大学と」『政策情報かわさき』（川崎市総合企画局制政策部）16号,pp.60-61.

［どうまえ　まさし・和光大学現代人間学部身体環境共生学科教授］